ブラジル第二アリアンサ鳥取村入植100周年及び
ブラジル鳥取県人会創立75周年･県人会館建設30周年

鳥取県議会訪問団　報告書

【令和８年７月２２日（水）～２９日（水）】



「せーの、ＶＩＶＡ！」 ― ブラジル鳥取交流センターにて県人会創立75周年を祝う

鳥 取 県 議 会

１　訪問日程及び訪問先

（１）日　程　　令和８年７月２２日（水）から２９日（水）まで

（２）訪問先　　ブラジル連邦共和国サンパウロ州（詳細は下記のとおり）

（３）主要行事　〇第二アリアンサ鳥取村入植 100 周年記念式典

〇ブラジル鳥取県人会創立 75 周年・県人会館建設 30 周年記念式典

２　訪問団メンバー

（１）鳥取県議会団

福田俊史議長、浜田妙子議員、広谷直樹議員　　事務局：澤田稔課長補佐

（２）鳥取県行政団

中原美由紀副知事、下田智美教育次長　　交流推進課：瀬良知紀課長、小谷優太主事

（３）その他

鳥取市団（深澤義彦市長、星見健蔵市議会議長ほか）

米子市団（伊木隆司市長ほか）

民間交流団（田中節照団長ほか鳥取ブラジル友好協会会員など）

３　訪伯の目的と現地で得られた知見等に関する所感

今回の県議会によるブラジル訪問は、①鳥取県民のブラジル移住史において端緒となった明穂梅吉（あけほうめきち）による 1906（明治 39）年の単身渡伯から 120 年、②その後 1912（明治 45/大正元）年の海外興業株式会社において移民部長として携わった移民事業に続き、③県民の集団・計画移住が開始された 1926（大正 15/昭和元）年の「第二アリアンサ鳥取村」入植・開村を起点としてちょうど 100 年の節目を迎えること、また、④ブラジル鳥取県人会が 1952（昭和 27）年の創立から来年（2027（令和９）年）で 75 年目となること、⑥1995（平成７）年に竣工したサンパウロ市内のブラジル鳥取県人会館（ブラジル鳥取交流センター）が昨年（2025（令和７）年）で 30 周年を迎えたことを踏まえて、これらを記念する慶祝行事の開催に当たり現地で組織される第二アリアンサ鳥取村自治会（会長：前田ヒカルド卓久氏）及びブラジル鳥取県人会（会長：村信政幸氏）にお招きいただいたことによるものである。

その上で、今般、県議会議員訪問団が負った責務は、現在の日系社会の礎となったかつての日本人移民が、明治・大正期以降に海を渡り、未開の山野を拓き、農地に適さない土壌を墾いた労苦と合わせて、異国人であるがゆえに生じた困難とも戦った歴史の上にあることを改めて認識し、理解を深めるとともに広く伝えていくことであるとの認識に立つものであった。

特に、日伯両国間での日本人移民労働者が担う役割についての行き違いや、当時ブラジル社会において優勢だったダーウィン進化論に基づく「民族白人化」思想から、日本人移民が人種の違いに伴う差別的な待遇、奴隷的な扱いを受けるなどの精神的苦痛を被る悲劇もあり、のちには、最初の移住・開拓から約 15 年を経て友好的なパートナーとしての地位を築くに至った日系人が、1940 年代に入り、時代の趨勢から枢軸国と連合国の対立・覇権争いの渦中に「敵性外国人」とされ一部迫害を受けたこと、さらには第二次大戦の終戦直後に日本の敗戦という事実に混乱を来し、日系社会そのものが対立と分断を生じ武力衝突するに至ったことも史実とされている。

我々訪問団は、こうした日本人移民の辿った数奇な運命や、必ずしも幸福ばかりではなかった移住政策について、確かに存在した本県の歴史の一部として、反省や教訓の観点から学びを得ること、翻って現代の県民福祉のあり方を再考する機会とすること、さらには、これまでの両国・

両地域における親交を礎に、未来志向で友好関係を築いていくため今後も引き続き代々積み重ねていく「交流」というマイルストーンとすることなどを目的として、県議会を代表する派遣の重責を担ったところである。

なお、今回の一連の行程を経た上での訪問意義と結果について、団員の所感を録取し（1）から（3）に整理する一方、訪問結果を元に行う県政等に対する政策提言や要望などについては、派遣議員による議場での発言（県政に対する一般質問など）をはじめ、個々の議会活動や政務活動等に委ねるものとする。また、詳細な行程や現地活動記録等については、次項以降に記す。

（1）ブラジル移住政策の歴史を元に

1927（昭和２）年にブラジルに渡った橋浦昌雄は、前年までの６年余り鳥取県岩美郡の旧大岩村長を務めた人物で、鳥取県海外協会のアリアンサ受入理事という立場で当時の移住政策に一役買った経歴がある。橋浦は特に「国力の源泉は農業」と説いて、未開の山林を切り拓き、自ら綿花養蚕に従事したとされる。

今なお国立国会図書館には「橋浦日記」が所蔵され、橋浦は第二次世界大戦から終戦後にかけて、日本人排斥やブラジル国内外の政情に伴う日系社会の内部対立の状況や移民者の日々の暮らしを伝えている。

また、移民史料館の展示の数々からは、我が国の移住政策において、移民者は「肥沃で広大な農地で大きな儲け」を期待して地球の反対側に送り出される形で渡ったが、現実は山野を切り拓いても一度の雨で泥地化する土壌改良の難しい土地柄だったと知る。粘土質の酸性土壌に最初はマメ科植物などで緑肥とし、牛や鶏など畜産の導入で有機化しながら排水環境を整えた。不毛の土地にも「日系移民の行くところ緑の大地となる」と讃えられたことは、現地で受け入れられた功績の証であるとともに、重機のない時代に人の手で開墾された当時の大変な苦労が偲ばれた。

移民政策に対する評価は様々あるが、鳥取県民のブラジル計画移住が始まったのは 1926（大正 15）年のことで、当時我が国では第一次大戦特需の後、1920（大正９）年のバブル崩壊・戦後恐慌に始まり、1923（大正 12）年の関東大震災とその震災債務処理に伴う 1927（昭和２）年の取り付け騒ぎに端を発した金融恐慌、1929（昭和４）年のウォールショックからの昭和恐慌と、日本経済史上稀に見る極めて不安定な世相の中で、農山村では長期に及ぶ慢性的な不況にあえぎ、いわゆる「口減らし」や身売りなどの暗い歴史があったとされている。

＊日本人移民者数

	戦前（-1940）	戦後（1952-）	合計
日本移民全体	202,514 人	53,489 人	256,003 人
うち本県からの移民	約 2,000 人	約 300 人	約 2,300 人

（石川友紀著「日本出移民の歴史地理学的研究」から）

ときの政府は補助金を活用するなど国策としてブラジルへ（あるいは満州へ）の移住を進めたが、時代背景と重ね合わせれば、当時の政策を「棄民」と評する文献は多く、「望まざる生き方を強いられた国民を存在せしめた」と断じられている。国民県民一人一人に安全で安心できる生活を保障する最低限の社会基盤も未成熟だったと振り返らざるを得ない。

当時ブラジルに渡った移民者たちが全てそうした後ろ暗い時代の被害者だったと言うには憚られるが、歴史に学び悲しみを繰り返すことのないよう、昨今社会問題化している受入外国人と

の共生社会追求を含めて、共助・公助、高度福祉社会を目指していくことこそ政治の役割であるものと確信した。

（2）ブラジル鳥取県人会設立のいきさつから

このたび第二アリアンサ入植100周年、ブラジル鳥取県人会創立75周年の記念式典が、大変多くの関係者の方々のご参集を得て盛大に開催されたが、まずは準備から運営に当たってご尽力いただいた村信政幸会長をはじめとするブラジル鳥取県人会の皆さんや、第二アリアンサ鳥取村の前田ヒカルド卓久自治会長など当地在住の方々に対して、心から敬意を表するとともに感謝を申し上げるものである。

その上で、改めて本県においてブラジルとの交流を軽んじてはならないと考えるのは、前述にある移民政策の歴史的背景や後世における政策評価、特に我が国において貧困を理由に家族を分断させるような未熟な社会構造、不十分な社会保障制度に伴う「犠牲に対する償い」にも似た反省という視点もさることながら、やはりブラジル鳥取県人会がいかにして設立されたかという経緯を語らずして論ずることはできない。

我が国では、かつて第二次世界大戦の惨禍と混乱を経て、新たな平和の時代を希求し、復興への希望に満ちて建設の槌音も絶えなかった1952（昭和27）年、春の鳥取市を襲った大火は多くの家屋を飲み込み、被災した24,000人の生活の術を焼失させた。市民の多くが絶望の淵に立たされ、明日をも知れない危殆に瀕したこのとき、遥か遠い海を越えて善意の手を差し伸べたのが、ブラジルに暮らす同郷の先人たちによる温かい志だった。最初の集団移住から四半世紀余り、鳥取県をルーツにする彼らは、必ずしも全てが裕福な成功を収めたわけでもなく、故郷を思いながら夢と希望を胸にブラジルの地に辿り着いたものの、当初は営農もままならず、国内外の政治情勢など幾多の困難に直面し、それでも強い信念と忍耐で苦難を乗り越えられた中で、水平線の彼方に生きる気力を失いかけた同胞を想い、サンパウロの地で義援金活動のために立ち上がり、結束された。

これほど温もりあふれる県人会設立の端緒に、県民市民はいつまでも感謝の念を絶やしてはならない。75年の歳月を重ねて紡がれた交流の絆は決して解かれることなく、先達に代わっても謝意と礼節を尽くす機会がまさにこの訪伯の本旨であるものと心得るところである。この尊い絆は未来を生きる次の世代にも守り継がれていくことを願い、遠く海を隔てた両国の間で、県人会の皆さんとともに肩を組み、ときに励まし合い、ときに讃え合いながら支え合い、親交を深めながら「チーム鳥取」の仲間として固い友情を育んでいくことが必要だと考える。

また同時に、アリアンサを開村した100年前、そして県人会が組織された75年前、それから今に至る歴史の積み重なりの中で、今回の訪問を通じて痛感させられたのは「アイデンティティの重み」である。我々日本人は、とりわけ鳥取県民は、日本あるいは鳥取県という社会環境の中である意味「当たり前」にその出自を自認し周囲と調和してきたところであり、その名に恥じない行動をとるべきとの規範意識の範囲だけでの生き方を強いられてきたかのように感じる。

このたびブラジルの大地に降り立ち、現地県人会の皆さんや日系社会とのふれあい、日系人と共存するブラジル社会の皆さんとの交流を通じて考えさせられたのは、100年前や75年前から変わらず「私のルーツは日本にある」「異国にいても私は鳥取県人である」とする強い精神性であり、その揺るぎない根幹が他者から理解され信頼関係の土台として敬意を持って受け入れられている点で、こうした精神文化が確かに受け継がれていることである。この伝統こそがまさに折り

重なる逆境をも跳ね返し乗り越え続けてきた原動力となったのではないか。翻って我々は現地を見習い、日本人であることの誇り、鳥取県民であることの矜持を心に据えて、他者との関わり合いの中で自覚を持って命を燃やしていくべきではないかと、尊敬の念を禁じ得ない学びを得た。

（3）ブラジル社会における性別の違いに起因する暴力への抵抗

2030 年を目標年とする国連ＳＤＧｓ「17 のゴール」の一つに「ジェンダー平等の実現」が掲げられており、とりわけ国際的非営利活動団体「世界経済フォーラム」が 2006 年以降毎年公表する「グローバル・ジェンダーギャップ・レポート」において数値分析・見える化されている「ジェンダー・ギャップ指数」は世界規模で注目度が高い。この指数は各国の経済（労働参加率や同一労働の賃金水準、管理的職位占有率など）、教育（識字率、就学・進学状況）、健康（出生児と健康寿命）、政治（首長や議員数など）の４分野における男女格差を比較したもので、「2025 年版」の日伯両国の比較は下表のとおりとなっている。

＊グローバル・ジェンダーギャップ指数（日本とブラジルの比較）

	総合順位	経済	教育	健康	政治
ブラジル	72 位/ 0.720	96 位/ 0.662	1 位/ 1.000	28 位/ 0.977	70 位/ 0.240
日本	118 位/ 0.666	112 位/ 0.613	66 位/ 0.994	50 位/ 0.973	125 位/ 0.085

（出典：World Economic Forum「Global Gender Gap Report Media Briefing 2025」）

一方、ブラジル国内では、同国法務省などが発表した 2025 年の治安統計によると、殺人事件による死者数が約 34,000 人余となり前年比で１割減、５年連続減少で治安は改善傾向にあるものの、「性別を理由とする女性の殺害（フェミサイド）」は過去最多に達しているとするブラジル日報 2026 年１月 22 日付けの記事のほか、その後の統計値では年間で 1,500 件超、全国で一日平均４人の女性が犠牲になったとも報道された。背景には、宗教的価値観に基づく根強い男尊女卑・家父長制の意識や、それに誘引される家庭内暴力の横行、被害女性の保護体制が不十分であることなどが挙げられている。

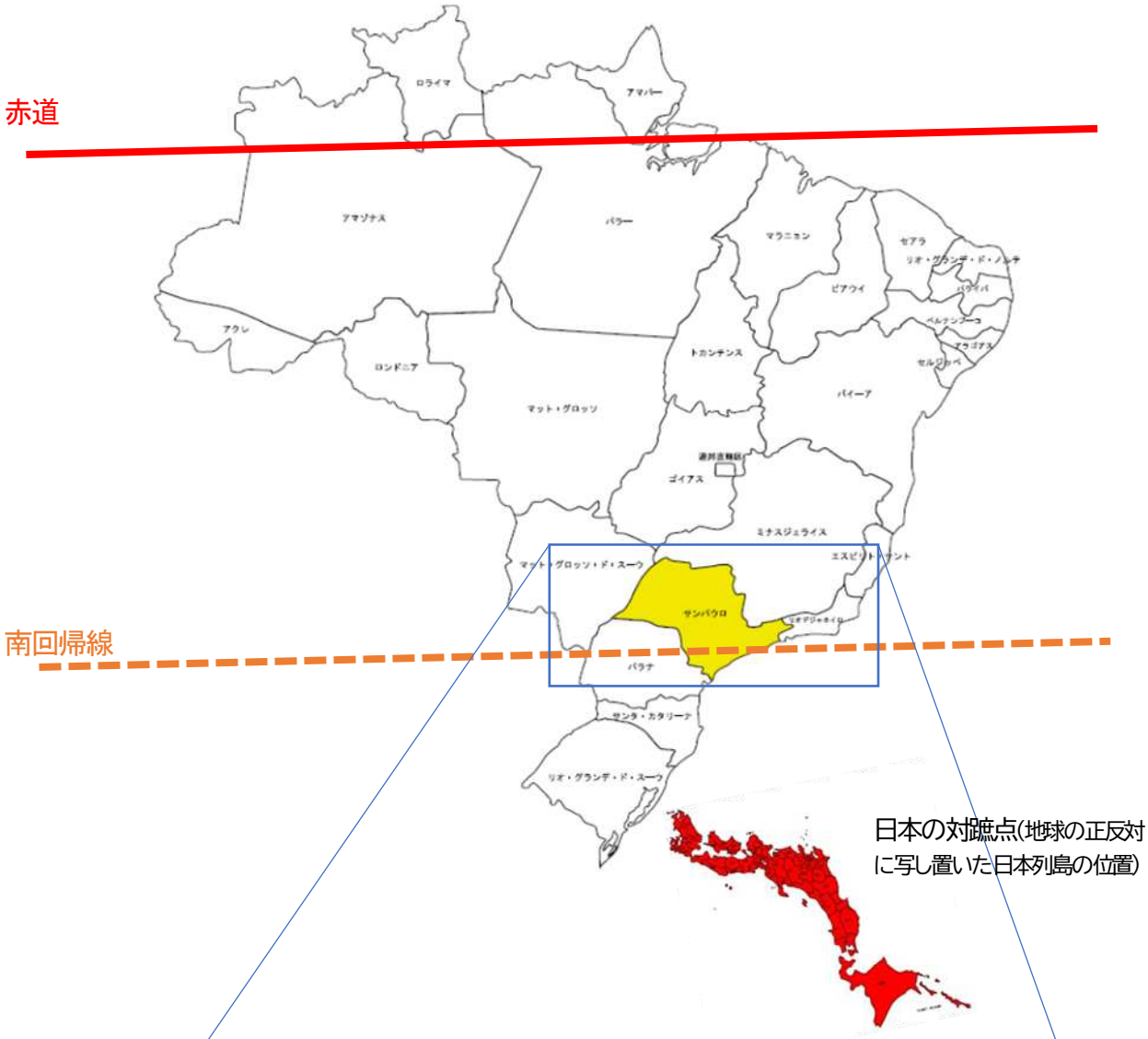
これまで同国では、2006 年に「家庭内暴力は人権侵害」と定義したＤＶ防止のための法律が制定されていたが、女性虐殺に抗議する大規模な市民運動が南米全土で展開され、2015 年にフェミサイドを通常殺人から独立させ撲滅を目指した法律が新たに定められた。さらに、「労働者党」出身の現政権下では 2024 年にフェミサイドを厳罰化する新法が成立している。こうした変遷を経ながらも、高止まりするフェミサイド件数に対して、サンパウロ市内で投宿したホテル近くの「パウリスタ大通り」では、昨年 12 月に約１万人の女性たちがデモ行進を行った。

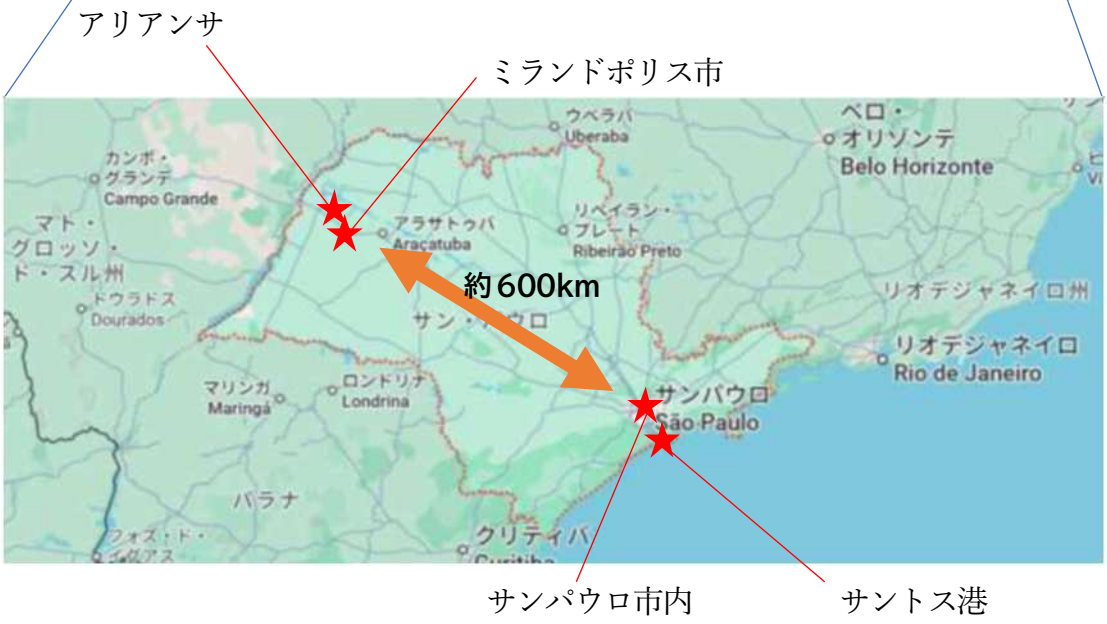
アリアンサを管轄するミランドポリス市庁では、パンタレアン市長ご夫妻と面会し、食事を共にしたが、レディファーストが板に付く市長の紳士的な振る舞いと、同国における女性の人権問題を社会課題として特に意識高く考えておられることで共鳴する部分もあり、心強く感じた。また、ブラジル鳥取県人会においては、婦人会組織が活発に活動されている姿も目の当たりにした。本県では、今年度、性別の違いに伴うモヤモヤ感などに気づき合い、一人一人が相互に思いやり支え合う心を育む社会を築いていくための「キズキアイ」県民運動が展開されている。ブラジルと日本とでは目指す到達点が異なるとしても、根本にある課題は共通しており、本県と現地の地方行政、あるいは自治会や県人会、地域コミュニティなどの各層で互いの取組を学び合うことができる可能性を感じる機会となった。

４　訪伯行程

月日	行程	
7/22 （水）	11:00～ 18:05～ 17:30～ 22:05～	県内空港 ⇒ 羽田空港 羽田空港 ⇒ カナダ・ピアソン国際空港（飛行時間 12 時間 25 分） 乗り継ぎ（4 時間 35 分） ピアソン国際空港 ⇒ ブラジル・グアルーリョス国際空港（飛行時間 9 時間 55 分） 【機内泊】
7/23 （木）	09:00～ 12:00～ 13:30～ 14:30～ 19:00～	グアルーリョス国際空港 ⇒ 宿舎 訪問団結団式昼食会（宿舎内） 開拓先没者慰霊碑参拝 ブラジル日本移民史料館視察 ブラジル鳥取県人会交流夕食会 【サンパウロ泊】
7/24 （金）	05:30～ 09:00～ 11:00～ 12:30～ 13:30～ 14:30～ 16:00～ 17:30～ 19:30～	宿舎発 在サンパウロ日本国総領事表敬 ヴィラコッポス空港 ⇒ アラサトゥバ空港（飛行時間 1 時間 20 分） ミランドポリス市庁舎訪問 ミランドポリス市長歓迎昼食会 ミランドポリス市議会議長表敬訪問 アラサトゥバ ⇒ アリアンサ 第一アリアンサ弓場農場訪問 第二アリアンサ鳥取村日本語学校訪問 第二アリアンサ鳥取村歓迎夕食会 アリアンサ ⇒ アラサトゥバ 【アラサトゥバ泊】
7/25 （土）	08:00～ 10:00～ 16:00～	宿舎発・アラサトゥバ ⇒ アリアンサ 第二アリアンサ鳥取村入植 100 周年記念式典・祝賀会 アリアンサ ⇒ アラサトゥバ 【アラサトゥバ泊】
7/26 （日）	08:00～ 10:50～ 16:00～	宿舎発 アラサトゥバ空港 ⇒ ヴィラコッポス空港（飛行時間 1 時間 15 分） ブラジル鳥取県人会創立 75 周年・県人会館建設 30 周年記念式典・祝賀会 【サンパウロ泊】
7/27 （月）	10:00～ 10:30～ 13:00～ 15:30～ 21:35～	宿舎発 サンパウロ州環境局森林院訪問（鳥取友好の森） ブラジル鳥取県人会送別昼食会 会場発 グアルーリョス国際空港 ⇒ カナダ・ピアソン国際空港（飛行時間 10 時間 5 分） 【機内泊】
7/28 （火）	06:40～ 13:20～	乗り継ぎ（6 時間 40 分） ピアソン国際空港 ⇒ 羽田空港（飛行時間 13 時間 20 分） 【機内泊】
7/29 （水）	15:40～ 18:00～(順次)	羽田空港着 羽田空港 ⇒ 県内空港

＜訪問先の位置図＞


赤道
南回帰線
日本の対蹠点(地球の正反対に写し置いた日本列島の位置)


アリアンサ
ミランドポリス市
ウベラバ
Uberaba
ベロ・オリゾンテ
Belo Horizonte
カンポ・グランデ
Campo Grande
マト・グロッソ・ド・スル州
アラサトゥバ
Araçatuba
リベイラン・プレート
Ribeirão Preto
約600km
ドウラドス
Dourados
リオデジャネイロ州
リオデジャネイロ
Rio de Janeiro
マリンガ
Maringá
ロンドリナ
Londrina
サンパウロ
São Paulo
バラナ
クリティバ
サンパウロ市内
サントス港

５　主な訪問結果

（１）日本移民開拓先没者慰霊碑参拝【7 月 23 日 13：30～】

ブラジル日本都道府県人会連合会の谷口ジョゼ眞一郎会長のほか役員の方々のご案内を仰ぎ、サンパウロ市のイビラプエラ公園内にある日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝した。団員は献花して先没者の辛苦に対し哀悼の誠を捧げるとともに、移民の御霊を合祀した霊廟で、平和慈母観世音菩薩木像と地蔵尊を前に焼香し、先没者の御冥福をお祈りして、記帳を行った。

かつて神戸港を出港した最初の移民船「笠戸丸」の乗客 781 名が 1908（明治 41）年 6 月 18 日にサンパウロ州南部のサントス埠頭に到着したことに由来して、現在に至っても日系社会はこの日を「移民の日」と定めて慰霊碑参拝を公式行事に位置付けているという。

慰霊碑は 1975（昭和 50）年、日本海外移住家族会連合会の故・藤川辰雄事務局長らを中心とする募金行脚によって建立されたが、特に初期の開拓移民は過酷な労働環境や劣悪な生活環境の中で行き倒れた無縁仏もあり、中には風土病に冒され先駆の果実を得られず異国の土と化した先没者もおり、これらの霊を弔う鎮魂碑として合祀されている。現在ではブラジル日本移民の心情的拠点ともなっているとされ、静謐な環境の中で先人に思いを致すひとときとなった。





（２）ブラジル移民史料館【7 月 23 日 14：30～】

慰霊碑のある悠久の公園施設からサンパウロ市街の日伯文化協会ビルに移動。１階には舞台・ホールを備える白亜の建物で、一行は上層階の７～９階に構える「ブラジル日本移民史料館」を訪れた。

同館には、明治・大正期から日本人移民が遺した物品５千点、写真１万点、記録書類３万点近くに及ぶ豊富な展示資料により、鳥取県民最初の渡伯者である明穂梅吉をはじめとする移民の軌跡や系譜のほか、山林を切り拓きながら営農に適さない土壌を改良していく涙ぐましいまでの努力、そして貧しい中でも守り育まれた日本文化や日本語教育とその世代伝承などを今に伝えている。



特筆すべきは、世界大戦の動乱期など、日本人移民が当時の国際情勢やブラジル国内における国民感情に翻弄される中で、ときに迫害され排斥の対象となりながらも、また、日系社会内部でも分断と衝突を生じながらも、草の根的な融和と協調を土台に、不安定な生活事情にあってもしたたかにコミュニティの絆を強く形成しながら、現在に続く日系人の生活基盤と社会的地位を確立したという歴史的評価を学び知る機会となったことにある。





（3）ミランドポリス市長、同市議会議長表敬訪問【7 月 24 日 11：00～】

サンパウロ市中心部から空路で内陸の高原地帯アラサトゥバ市（人口約 19 万 7 千人）を経由して、さらに陸路をバスで約 80km、第二アリアンサ鳥取村を管轄するミランドポリス市（人口約 2 万 6 千人）に入り、エダーソン・パンタレアン・デソウザ市長ご夫妻を表敬するとともに、同市役所職員の皆さんの歓待を受けた。また、同市議会議事堂においては、エマーソン・カルヴァーリョ・ソウザ議長のほか市議会議員の皆さんと懇談の機会を得た。



最初に我々訪問団からは、アリアンサ入植から 100 年の長きにわたり、鳥取県民の移住受入れや、現地における日系社会の存立そのものに理解を示し、日本語教育や日本文化の継承を支えていただくとともに、営農・営村に当たって協働・連携を図り、共栄・発展にご尽力いただいている市民の皆様に対して謝意を述べた。

パンタレアン市長からは、わずか 2 日間ではあるがこの街を我が家のように思ってゆっくり過ごしてほしいとの歓迎の挨拶をいただいた。また、かつて日本人移民がこのサンパウロ奥地の不毛な土地を購入し、農作物を育む豊かな大地に生まれ変わらせたことなど、ともに手を携えて発展してきたパートナーであり続けたことについて「日系人は我々ミランドポリスの宝」と表現され、これまでの支



援と交流の歩み、日本人移民や日系人の功績に対する感謝の意を述べられ、「両手を広げて迎えたい」との温かい言葉があった。また、カルヴァーリョ議長からは、日本人移民の存在が原住民にとっても教育やスポーツなど素養や嗜みのある生活の彩りと「文化」を植え付けていただいたとして、感謝の心を伝えられた。

同市及び同市議会への表敬を通じて、現地では「鳥取県のおかげで『学び』を得られた」との賛辞をいただき、これまでの絆を受け継いでいく使命をもとに友情が100年先も続くことを祈念するとの温かい言葉を交わし合い、未来に続く親交を約束した。





（4）アリアンサ訪問【7月24日14：30～】



ミランドポリス市中心部からアリアンサに到着。第一アリアンサ村では移民農地として先駆的な役割を果たした弓場農場を訪れ、移住地で営農指導に当たった北原地価造（きたはらちかぞう）の邸宅を改装した「アリアンサ移住記念館」など、弓場まりあん氏に現地を案内していただいて開墾当初の日本人移民の足跡を辿った。中でも、アリアンサ移住地建設の祖とも言える日本力行会（りっこうかい）で会長を務めた永田稠（ながたしげし）が「移住訓」として遺したのが「珈琲より人を作れ」との言葉。集団移住当初は出稼ぎ労働者を送り出して放置するだけの「棄民政策」だったことに対して、長野県出身の永田は長野県庁に働きかけて「信濃海外協会」を組織し、移住地の生活環境整備とともに子どもの教育をはじめとする文化活動を重視し、人格を陶冶するコミュニティ造成に尽力した。



この移住地建設の成功例が、自立的な営農・営村の源泉となり、第二アリアンサ鳥取村や第三の村、あるいはブラジル各地に日本政府による国策移住地建設運動へと展開することとなった。「アリアンサ」は本来「連合、協同」、永田は「一致、協力、和合」の意味するところとするが、現地では結婚指輪のことをも指すとされている。いわば「絆が結ばれた始まりの地」において当時の日系社会の生活文化に触れ、知見を得て理解を深める貴重な機会となった。

続いて第二アリアンサ鳥取村に入り、小学生から高校生年代の子どもたちが共に学ぶ日本語学校での授業に立ち会い、同行する下田教育次長や現地に赴任している西澤教諭による「鳥取クイズ」、折り紙を使った特別授業など、鳥取県の魅力を伝える風景を参観した。夕刻には鳥取村の皆さんから歓迎を受け、交歓のひとときを過ごした。





（５）第二アリアンサ鳥取村入植 100 周年記念式典・祝賀会【7 月 25 日 10：00～】

朝、第一アリアンサ入口付近にある「北原地価造頌得公園」に立ち寄り、「ありあんさ最初之入植地点」と銘刻された石碑を訪ねた。

午前 10 時からは第二アリアンサ鳥取村自治会館において「第二アリアンサ鳥取村入植 100 周年記念式典・祝賀会」が開催され、最初に自治会館玄関にて「第二アリアンサ鳥取村百周年」の記念銘板を除幕した。



記念式典では、同村自治会の前田ヒカルド卓久会長から「100 年前、47 日かけて海を渡った先人は、電気も機械もなく馬とともに山を拓いて互いに助け合いながら、何もないところから村を造った。鳥取県ゆかりの在住者はわずか２世帯になったが、今後も鳥取との繋がりを大切にしながら、アリアンサ第一、第二、第三が協力して全体を盛り上げ、未来に向けて村を守り発展させていきたい」とする開式の辞を述べられたのに続き、先没者に対する黙祷、日伯両国国歌及び鳥取県民歌の斉唱、石破茂前総理の祝電披露のほか、平井伸治知事によるポルトガル語を交えたビデオメッセージが放映された。



訪問団からは、来賓として中原美由紀副知事、福田俊史県議会議長、深澤義彦鳥取市長、伊木隆司米子市長、鳥取ブラジル友好協会で役員を務める民間訪問団の田中節照代表が祝辞を述べた。さらに、現地で合流した在サンパウロ日本国総領事館の鈴木誉里子総領事、ミランドポリス市長や同市議会議長、現地在住

の関係者の方々が祝意を表し、入植・開村から積み重なる鳥取村の歴史と継承された日系文化、鳥取スピリットの重みに思いを致し、村民に対する敬意を表するとともに厳粛な雰囲気の中で式典が執り行われた。



一方、午後からは、隣接の鳥取村日本語学校に赴任経験のある教員からスライドを使った思い出の活動報告発表、ステージでは同校の現役生徒や県人会メンバーなどによる歌唱や舞踊の披露、淀江さんこ節保存会による演舞、飛び入り参加も交えてのしゃんしゃん傘踊りなど、時間が経つのも忘れるほどの盛大な文化交流機会として会場を盛り上げ、式典に花を添えた。

会場内では、「かつて入植時には女性を暴力から守り、共同体が団結して原生林を肥沃な大地に変えたが、これまでに継承された第二アリアンサ鳥取村の精神性と伝統はサンパウロ州全体に向けて誇るべきものであり、この価値を重く受け止め、この先へと受け継いでいくことが必要」とする営村の歴史に対する評価や、「現在の鳥取村は鳥取県出身ではない方も多くなったが、他から尊敬されるコミュニティの一つであり、『鳥取の心』を持った素晴らしい地域であることを誇りに思う」などの賛辞、「これまで100年の歴史に続く『これから』が大事で、『教育によって文化が育つ』という言葉の実践のためにも、ぜひ教員派遣を継続していただきたい」、「将来、鳥取県とブラジルとの架け橋になりたいという子どもたちは実際に存在するが、そうした夢を叶える留学制度の創設・拡充・継続を期待している」などの声も聞かれた。



（6）ブラジル鳥取県人会創立75周年・県人会館建設30周年記念式典・祝賀会【7月26日16：00～】

プロペラ機でサンパウロ市内に戻り、建設30周年を迎えたブラジル鳥取交流センター（鳥取県人会館）を会場に「ブラジル鳥取県人会創立75周年・県人会館建設30周年記念式典・祝賀会」が開催され、来賓として出席した。

開会に当たって、ブラジル鳥取県人会の村信政幸会長による式辞として、鳥取県による留学生・研修生の受入れをはじめとする人的交流や、県人会活動等に対する物的支援を講じられたことへの謝意と合わせて、将来世代へ「鳥取の心」を伝えていく意気込みを表明された。



続いて平井伸治鳥取県知事によるビデオメッセージや石破茂前総理の祝電が披露され、中原美由紀副知事や福田俊史県議会議長など、順次、来賓による祝辞が述べられた。このほか、永年にわたり県人会活動等に多大な貢献をいただいた方々の功績を讃える功労者表彰や、県人会メンバーによる祝賀ステージとしてしゃんしゃん傘踊りや淀江さんこ節が披露されるなど、華やかで盛大な祝宴の演目が続き、新たな節目に向けて絆を紡いでいくことを固く誓い合った。





（7）サンパウロ鳥取友好の森視察【7 月 27 日 10:30～】

最終日、帰国の途に就く午前には、サンパウロ州環境局森林院が管理する「ブラジル鳥取友好の森」を訪ね、同局環境研究所のルイス・アルベルト・ブッチ氏と、かつてブラジル鳥取県人会の役員を務めた特定非営利活動法人ＶＥＲＳＴＡ山添源二名誉顧問に現地をご案内いただきながら、過去の周年行事における記念植樹を辿った。公園内では南回帰線上の石碑や、うららかで心地よい日差しを楽しむ現地の方々の姿を横目に散策するとともに、展示資料館においては原生林の開拓や木材活用の歴史、木工・工芸品の変遷について解説を受けた。展示された調度品の数々は、まるで鳥取民藝にも共通する「用の美」の精神を宿すものであるようにも感じた。







６　参考

（１）ブラジル連邦共和国の概要等

＜ブラジル連邦共和国の概要＞（出典：外務省ホームページほか）

面　積	851.2 万 km²（日本の 22.5 倍）、世界第５位
人　口	約２億 1,300 万人（2025 年）、世界第７位
民族	欧州系(約 44%)、アフリカ系(約 10%)、東洋系(約 0.4%)、混血(約 45%)、先住民(約 0.6%)
日系人	日系人総数推定 約 270 万人（2025 年）
言　語	ポルトガル語
経　済	名目ＧＤＰ ２兆 2,088 億米ドル、一人当たり 11,403 米ドル（2025 年） 物価上昇率＋5.0%、失業率 6.0%、対ブラジル貿易：輸出 7,371 億円、輸入１兆 3,551 億円
主要産業	製造業、鉱業（鉄鉱石他）、農牧業（砂糖、オレンジ、コーヒー、大豆他）

＜サンパウロ州の概要＞（出典：在サンパウロ日本国総領事館ホームページほか）

位置等	州都サンパウロ市は南半球の亜熱帯地域、標高約 800ｍの高原地帯で南回帰線周辺。
面　積	248,219.4 km²（鳥取県の約 70 倍、ブラジル全土の約３％に相当）
人　口	約 4,441 万人（2022 年）
気　候	年間平均気温は摂氏 17～24 度。 訪伯した７月は冬季に当たり、平均気温摂氏 17.9 度（日中最高 23.8 度、最低 13.7 度）。
主要産業	ブラジルにおける工業・商業・金融の中心地で、そのＧＤＰはブラジル全体の 31%に相当。 オレンジなどの果樹やサトウキビ、コーヒーの生産量でも国内上位に位置する。

＜ミランドポリス市の概要＞（出典：県交流推進課調べ）

位置等	サンパウロ市中心部から西北西に約 600km 内陸に入った、標高 400～500m の高原地帯
面　積	920km²（本県中部地域 903km² とほぼ同じ広さ）
人　口	約 26,000 人
主要産業	酪農（肉牛、乳牛）、養鶏、養蚕、コメ、コーヒー、トウモロコシ、果樹など

（２）現地における鳥取県ゆかりの基盤

＜ブラジル鳥取県人会の概要＞（出典：県交流推進課調べ）

会員数	約 250 家族
代表者	会長：村信政幸（むらのぶまさゆき）氏　※東伯郡出身
設立経緯	1952（昭和 27）年、鳥取大火の救援募金運動を契機として発会

＜第二アリアンサ鳥取村の概要＞（出典：県交流推進課調べ）

世帯数	約 41 世帯（約 117 人）　※うち鳥取県関係２世帯
代表者	自治会長：前田ヒカルド卓久（まえたひかるどたくひさ）氏　※両親が西伯郡出身
移住経緯	1926（大正 15）年に鳥取県海外協会がサンパウロ州奥地に 3,000 町歩の土地を購入して移住者を送り出した（１町歩＝１万㎡）。「アリアンサ」とは現地語で「協同・同盟」の意。

＊第二アリアンサ鳥取村日本語学校（県交流推進課調べ）

鳥取村の子どもたちに対する日本語教育を行うための私塾的な学習の場として鳥取村に設けられた学校で、当初は現地一世の方が日本語教師を務めていたが、高齢化などもあり教育人材の確保が困難であることを背景に、1993（平成５）年に当時のブラジル鳥取県人会長から鳥取県知事に日本語教員の派遣要請があり、翌年以降、本県から継続して教員派遣を行っている。

現在派遣されている西澤伸之（にしざわのぶゆき）教諭は鳥取市内の小学校で教鞭を執り、今年６月から現地に赴任されているところ、今般の訪問団への同行や祝賀行事の司会進行などにも携わり、すでに現地に溶け込み、児童生徒だけでなく鳥取村の住民とも信頼関係を築いて、語学や文化の伝承のほか、鳥取県勢など鳥取県にちなんだ学習機会を提供する架け橋としての役割を担う活躍が垣間見られた。

〈〈編集後記に代えて〉〉

バミューダからカリブ海を越え南米大陸に機影を落としていよいよ赤道を越える。さらに南下する窓の向こうには、空と地平との区別もつかぬ朝、漆黒に眠る無限の大地が大海原に似て、ただひとつぼうっと浮かび始めた小さな太陽が、弓に弾かれるがごとく緩やかに青白く高さを増していた。100 年前の当時、家族や親類、自らのアイデンティティだった故郷から（今生の別れになるとも知らず）一時の別離と旅立った先人たちは、帆の先で闇を照らすこのまん丸の光に夢と希望を見出し、決意と覚悟のうちに身寄りのない異国の地に降り立ち、また一方では、当地に辿り着かず葬られる者もあったという。

羽田を発って 27 時間余り、手元のスマホをタップすれば帰りの航空券が「帰ること」を約束してくれている。ふと目を瞑り、故郷への帰路も保障されなかった海陸 50 日にも及ぶ旅路とその後の苦難に思いを馳せるとき、ただ親睦だけがこの訪問団の意味するところではないと心に念じ、窮屈な座席で強いられた節々の痛みを振り払って、荷を背負いタラップに歩を進めた。

── それから数日間に及ぶ現地の方々との交歓は、まるで遠い親戚と「すぐまた会えなくなる」寂寞を互いの心の奥に追い遣りながら、このひとときを大切にしたい思いで紡がれた。カメラを構えて「ＶＩＶＡ！」と言えば、揃って大きな口で「ＶＩＶＡ！」と笑顔の花が咲く。表紙の写真に見える日伯の心の絆は、この先、世代が変わろうともきっと確かな未来を明るく照らしてくれるに違いない。

（団員の手記より）